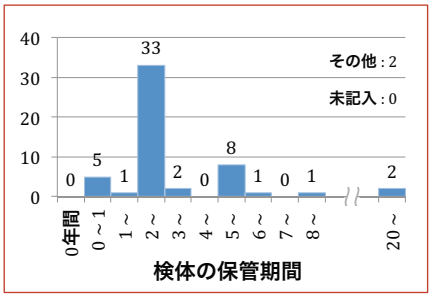
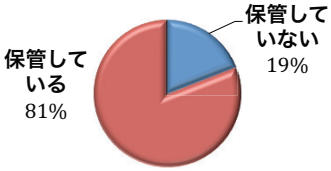
6.　遡及調査について

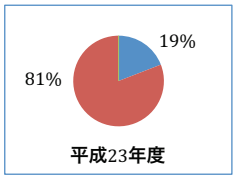
N=68

輸血前の検体の保管を実施していますか。



N=55

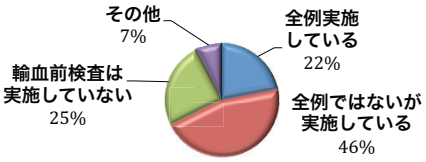




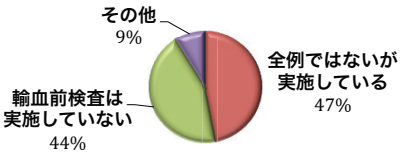
6.　遡及調査について

N=68

【輸血前検査】【輸血後検査】を実施していますか

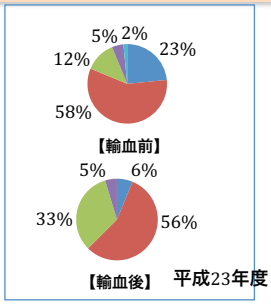


【輸血前】の感染症検査

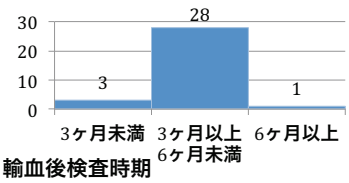


【輸血後】の感染症検査

輸血実施前の患者検体を保管すること
「血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン」（厚労省）

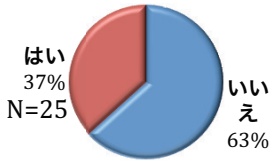


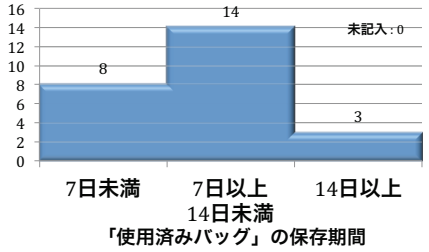
N=32



6.　遡及調査について　新規設問　N=68

使用済みバッグの冷蔵保存





まとめ

- 輸血用血液製剤供給実績（H23年度）をもとに、上位75施設の医療機関を対象とした調査により、68施設の回答（回収率82.9%）があった。
- 広島県の医療機関における輸血療法の現状と実態を把握する目的で調査を行い、次の結果を得た。

- DPC（診断群分類包括評価）を導入しているのは、44%
- 「輸血療法委員会」は78%53施設が設置し、66%が年に6回以上委員会を開催する。53%がその機能を果たしていると評価している。
- 輸血責任医師を任命しているのは47施設69%。
- 専門の輸血部門を設置し血液製剤を管理しているのは41%28施設。設置してない39施設では、検査部門/薬剤部門/臨床検査部門がそれぞれ25-30%の割合で管理している。検査部門で検査を行うのは82%、外注が3%であった。
- 常時あるいは専任の臨床検査技師を配置しているのは59%40施設。夜間休日の検査体制は検査技師による24時間体制が37%、オンコールが46%であった。
- 輸血管理料の算定をしているのは43%29施設にすぎず、その理由は、常勤医師を配置していないが半数を占めた。
- 輸血適正使用も算出してたのは28%、していなかったのは25%で、していない17施設中、半数以上がアルブミン使用量を赤血球の使用量で除した値が2未満でないことを理由として挙げた。

まとめ

- H23に輸血用血液製剤を廃棄処分にしたのは、68施設中54施設79%、赤血球製剤が多く、血漿製剤が最も少なかった。
- 赤血球製剤の在庫はA型/O型はすべての施設で在庫。B型80%、AB型60%

- 輸血前検体の保管をしているのは、81%55施設。
- その検体の保管期間は2年が最も多く、施設の6割以上をしめた。

- 輸血前検査/輸血後検査の実施については、
  - 輸血前検査を実施していないのは25%、全例実施しているのは22%に過ぎなかった。
  - 輸血後の検査については、実施していないのは43%であった。
  - 輸血後の検査を3ヶ月後に実施しているものが最も多かった。
- H23年12月の血液製剤の使用について、患者一人当たりの平均血液製剤使用量は、赤血球製剤で4.5（単位/人）、血小板製剤で26.2（単位/人）、血漿製剤で11.0（単位/人）、アルブミン製剤で44.1（g/人）であった。
- 血液製剤に関する記録を、作成・保管していたのは91%（62施設）で、そのうち半数以上の48施設が20年以上使用記録を保管していた。
- 使用済みバッグを保管していたのは37%で、そのうちの56%の施設の保管期間が7日以上14日未満であった

ご協力ありがとうございました。
広島県合同輸血療法委員会

厚生労働科学研究費補助金
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

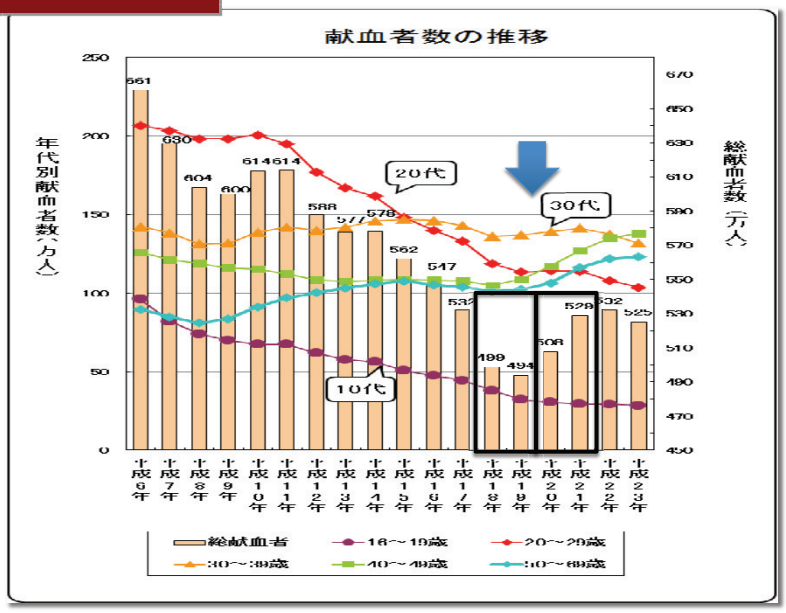
献血推進のための効果的な広報戦略等の
開発に関する研究班（白阪班）

献血者数および献血本数に関する将来推計の試み

広島大学　大学院医歯薬保健学研究院
疫学・疾病制御学

田中　純子

情報提供

わが国の献血者数の推移

血液事業の現状
厚生労働省